おさん狐

金津民話

（お子供さんに読んであげて下さい）

ずっと昔、戒山の中腹に一つのお寺がありました。そしてそこには始末に終えないイタズラ好きの小僧が一人おりました。

ところが、いつ頃からかこの山へ「おさん」という尾の先の白いめ（雌）狐がやって来てお寺の近くに住むようになりました。なんでもこの狐は金毛九尾の狐の子孫とかで、孫杓子（マゴシャクシ）というものを持った古狐でした。

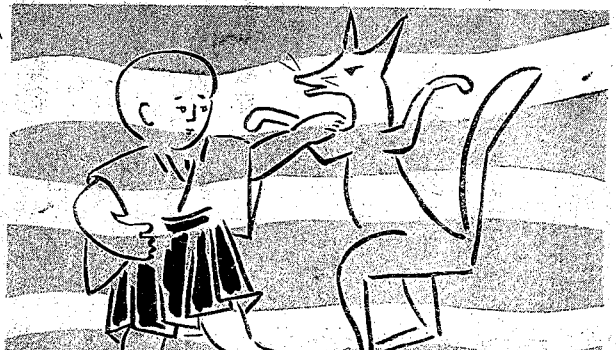
一体この孫杓子というのは、やたらの狐は持っていないので相当年もとり手柄もあったものが、お稲荷さまのお眼に止ってさずけられるものなのです。だからこれを持っている狐はなかなか幅がききます。しかもこれさえ持っていれば自分の思う事は何でも叶うという重宝な品。だからおさんはこの孫杓子の力で馬にもなれば羊にもなる。小さいものはノミ、シラミから大きいものは天にもとどく大入道にもなれます。市日市日には女に化けて近所の町へ出かけては好きなものを買って来ます。

これを知っているのはお寺の小僧です。そうと知ったからには唯ではおけぬ。欲しくて欲しくてたまりません。何とかして取ってやりたいものだと思っていると、よい機会がやって来ました。

その日、和尚さんはふもと（麓）の村へ法事に行って留守でした。小僧は今日こそは孫杓子をとってやろうと考えて何をする気か、物置小屋をがさがさいわせてさがしていましたが、やがてとり出したのは一本の破れ傘でした。小僧はそれを持っていそいそおさんの穴へ参りました。そして傘をひろげてその蔭にかくれるとじっとおさんの出て来るのを待っていました。おさんはそんな事とは知りませんから、ひょっこり穴から出ると例の孫杓子を三べん振ってくるりとかえりました。するとどうでしょう。そこにはもう立派な姉さんが立っているではありませんか。そしてすたすた山を下りて行こうとするので、今まであつけにとられていた小僧も急に気がついて「おさん、おさん」と呼びました。おさんは、はてな？　と思ってあたりを見たが誰もいない。また歩きかける後から「おさん、おさん」これは変だ、ときょろきょろあたりを見ている後から「おさん、俺だよ」と云って出て来たのは思いがけないお寺の小僧。「おや、小僧さんどこにいたのだえ」「うん、俺のいたところはどこだっていいが、お前うまく化けたことを見つけなかったというからは、やっぱり俺にうまい法があるのかえ」「あるとも、あるとも。この法さえやればきり（霧）かかすみ（霞）か、すうっと体が消えてなくなるといううまい法さ。どうだ、えらいだろう」「それやいい法だね。私にも教えないかえ。お礼はたんまりするぜ」「どうしてどうしてこの法がやたらに教えられるかえ」「そう云はずに教えたっていいだろう。……ああそうだ。私の孫杓子と取換えよう。それならよかろうが……」。

小僧は狐がうまく乗せられたので嬉しくてかなわないが、そんなことはおくびにも出しません。一寸考えるようにして「そうだなあ、孫杓子とな換えようかなあ。一寸俺の方が損だけれど……」小僧はうまうま破れ傘と孫杓子と取換えてしまいました。

さて二方、おさんはこれはよいものを手に入れた、さっそく使って見ようと思って町へ行きました。そして油揚屋の前へ行くとそっと傘をひろげて下から毛むくじゃらな手をぬっと出しました。さあ、これを見た油揚屋の主人は怒つたの怒らぬの「こん畜生！」というなり一ぜん火箸で手の折れる程打ちつけました。おさんは「キャン」と一声叫ぶと後をも見ずに逃げ帰りました。しかしおさまらぬのはおさんの胸の中、あんな小僧如きにまんまとだまされて、何より大切な孫杓子をとられたのが口惜しくてたまりません。何とかして取りかえそうと考えました。小僧は小僧で、うまく孫杓子を手に入れたんでほくほくものです。今日も縁側でしきりといちつ



ていると奥の間から和尚さんの声「小僧、小僧がもうお帰りだ。小僧はいないか」さっき出たばかりの和尚さまなんてまあ早いことだろうと思いながらそれでも「ハイ」と答えて立ちました。「お帰りでございますか」和尚さんの前に手をつきますと「おお、今急に帰ったんだが、なんだそうだなあお前はおさんをだまして孫杓子をとつたというがほんとか」「はい、実は十日ばかり前にとりましたんですが、誰がそんなことを云いました」「いや村中の評判で、是非

小合音頭

（民謡風に）

ヘハアー
小合よいとこ　サアサよいとこネ　（ハアヨイトナ）
越路に花はバットと咲き　音頭とる娘はネ　（ハアヨイトナ）
花の小合の　ヨイトヨイトサノ　よい娘　（ハアとる娘は）
ヘハアー
米はみ宝　サアサみ宝ネ　（ハアヨイトナ）
黄金の波をドンと越え　音頭ひさけばネ　（ハアひさけば）
米の小合の　ヨイトヨイトサノ　穂もおどる
ヘハアー
花はべに花　サアサべに花ネ　（ハアヨイトナ）
平和の空にバット咲きや　音頭はずんでネ　（ハアはずんで）
今日も小合に　ヨイトヨイトサノ　陽はのぼる

見たいと云ってるんでなんなら貸してくれないか」「はい、お貸しするのはおやすいことですが、和尚さまお貸し申したら便所の掃除だけはやめさせて下さいますか」「こいつなかなかずるいな、まあいい、せんでもよいからまあ出した出した」和尚さんにせき立てられて小僧は大自慢で孫杓子を持って来ました。「うん、これかなる程たしかにこれだこれは俺の孫杓子だ。小僧奴よくもだましたな」さあ大変、和尚さんとばかり思っていたのはうまく化けたおさんでした。おさんはこういうより早く正体を現わして一散かけて山へ走って行きました。小僧はせつかくとつたのにと、くやしがっていましたが何と思ったかすたすたと山を下りて近所の町へ出て行きました。そして何やら風呂敷包を持って来たが、今度は部屋へはいって一日かかって何かしらえています。やがて出て来たのを見ると、これはまあ何としたこと、どう見ても立派なお稲荷さまです。さて何をする気だろうと思って見ていると、小僧はしずしずと勿体ぶった歩きぶりをしながら、おさんの穴まで来ました。「おさん、おさん」声までつくり声を出しています。おさんはまた小僧がやって来たのかも知れぬと思って知らん顔をしていると、また「おさん、おさん、おさんはおらぬか」というので、そっとのぞいて見ると大変だ。そこにはお稲荷さまが立っていらっしゃいます。おさんは驚いて穴からとび出すと平伏してしまいました。「うんおさんか、その方噂に聞くとお寺の小僧に孫杓子を取られたと申すが、どうじゃ誠か」お稲荷さまのお声はおごそかです。「はういいえ、どう仕りまして、さようなことは命にちかつてございませぬ。まあ御覧下さりませ」おさんは小僧から取りかえておいてよかったと思いながら、奥から木の漆包の孫杓子をうやうやしく持って参りました。「おお、そうか、どりや見せよ」お稲荷さまはこう云って孫杓子を取ったかと思うと着ていたものをかなぐり捨て「おさん、俺だよ、小僧だよ」と云ったかと思うと大切な孫杓子をぽっきりへし折ってしまいました。おさんは泣いてくやしがったが仕方がありません。孫杓子をなくして普通の狐になってしまいました。

その後、このお寺もすたれて跡さえなくなりましたが、唯山のみは「おさん」のいたことに因み「サンキョヤマ」といっています。

みなさん御存じの朝日の北西にある「山境山」がそれなのです。

文・鈴木　富雄
画・横山　精一